

コメント…「問い方」の弁別

「思想史学の問い方」は対象ごと、あるいは研究者ごとに様々であろう。ただし、「みんなちがってみんないい」わけではなく、筋の良い「問い方」と筋の悪い「問い方」が存在するように思われる。本コメントでは、田尻報告のいう〈主体〉論・〈構造〉論のそれぞれについて、有効な「問い方」とそうではない「問い方」の弁別を試みたい。

田尻報告のいう〈主体〉論とは、前史叙述型の思想史の一種といえる。終点を設定し、それに向かって進む思想の流れを描くに研究には、〈主体〉論のほかに、「国民国家」批判の思想史研究も含めることができよう（このような研究では、終点は悪しき「国民国家」となる）。

高山 大毅

前史叙述型の思想史研究における筋の悪い「問い方」は、現在の良識や他地域の思想を基準に、過去の思想の「達成」と「限界」をあげつらう研究であろう。たとえば、近代的な諸観念の萌芽はあったが、封建社会の制約から抜け出せなかった。あるいは国内の民衆への共感は見られたが、植民地の民衆は視野に入っていなかった——等々。

この種の思想史叙述——本稿では「達成・限界」論と呼ぶことにする——は、現在の良識や最新の舶来思想に比べれば、欠陥の多い未熟な思想の列伝編纂と化し、不毛である。もっとも、好ましい思想の萌芽を過去に探ることに積極的な意義を見出す向きもあるかもしれない。

しかし、それは研究者の抱く理念や思想の正しさを読者に直接訴えるのではなく、「過去を振り返れば先人も似たようなことをやっていたのだから、抵抗感を抱かずにこの思想を受け入れましょうよ」と人々を籠絡する手法という面を持っている。研究者はそのことを明確に自覚すべきであろう。

今回の田尻報告で言及されていた論者は、凡庸な「達成・限界」論の罫を免れている。それは、彼らが歴史を遡る際に手がかりとした人間像が、世間の良識の枠内に収まらず、また他地域の思想にも見られない独特さを具えていたからであろう。

丸山眞男が「主体」を論ずる時に念頭にあったと考えられる無教会派の人士（赤江達也『紙上の教会』と日本近代——無教会キリスト教の歴史社会学』岩波書店、二〇一三年参照）、また、安丸良夫の「通俗道德」論の背景にある真宗篤信地域の人々の生活。あるいは、丸山の「忠誠と反逆」の葉隠武士や吉田松陰、あるいは安丸にとつての出口なおを想起しても良い。これら特異ともいえる〈主体〉を内在的に理解しようと試み、そこに普遍的な問題を読みこんでいったことが、彼らの研究を卓越したものになっている。

〈主体〉論的な思想史を継承するためには、世間の良

識や舶来の最新学説に回収されない、奇矯とさえ見える人間像の中に、普遍的な問題を発見し、展開する努力が必要であろう。

〈構造〉論は、特定の人々の思考の類型^{パター}を抽出することに重きを置いた思想史研究といえる。

類型抽出型の思想史が悪手に陥るのは、対象の設定——田尻報告の言葉を用いれば「単位」の設定——が複雑な場合であろう。安易な「日本文化」・「日本人」論や、「儒教」を一括りにして論ずる型の研究がこれに該当する。

類型抽出の思想史の成否は、対象の切り出し方が鍵となっている。たとえば、渡辺浩『近世日本社会と宋学』（東京大学出版会、一九八五年）、黒住真『近世日本社会と儒教』（ぺりかん社、二〇一三年）の書名に表れているように、漠然と「日本」ではなく、「近世日本」に対象を限定したことに注目したい。

この二〜三十年来、盛んであった「東アジア」を視野に入れた思想史も、つなげることよりは、対象を切り分けることが議論の生産性を支えていたのではなからうか。かつて島田虔次は、外面化／内面化という一つの図式の中で東アジア諸地域の思想史を整理しようとして

いた。これに対して、八〇年代以降の「東アジア」思想史は、日本社会と他の「東アジア」諸地域の社会は様々な面で異なり、別個の枠組の中で思想が展開していることに注目した。同じ図式・同じ物語の中に諸地域の儒学を回収することを止め、「東アジア」諸地域の儒学を比較しながら切り分けていったのである。

近年、マンネリ化の気味のある「東アジア」思想史研究を再び活性化させるために、もっと対象の地域や時代の「分割」を進めた上で思想比較を試みるのはどうであろうか。たとえば、江戸期でも寛文以前と以後、寛政以前と以後とではかなり思想の趣きが変わる。これらの時代を切り離れた上で時代ごとの思考の型を抽出する。その上で、同様の「分割」を行なった他地域の思考の型と比較する。同時代であることにこだわらず、社会の流動性が高まった時代ということで、明末と江戸末期を比較するといったこともできよう。

念のために強調しておく、私は「東アジア思想史」型の研究を止めることを主張しているのではない。思考の型を抽出する際の「単位」設定にもっと工夫が必要であると考えているのである。

「二つの講座」について多くを論じる紙数は残されて

いない。日本思想史学は諸学の「入会地」的な性質を有している。そのため、「講座」物の編纂は、学界の共通了解と論点とを確認する機会として、他の学問領域に比べて、一層重い意味を持っていると思われる。今回の二つの「講座」は論集としては傑出しているが、たとえば、隣接領域の研究者が、現在の研究状況を知る指針とするには、やや不親切なのではないかという印象を抱いた。

以上、技術的な観点からのコメントが多いことに違和感を持たれる方がいるかもしれない。専門化と細分化が進んだ学界の中で、大きな問題関心を失い、細かな技の詮議に血道を上げている——といったような。しかし、学問の危機に対して憤り、不満を漏らしてばかりでいるよりは、日常的な研究上の工夫を積み重ね、筋の悪い「問い方」を減らすことが、研究の品位を上昇させ、世の人々の斯学に対する評価を高めることになる。私は考えている。昨今、学会は業績生産のための具として捉えられがちだが、このような工夫の情報交換の場としての側面を持つことにもっと目を向けても良いのではなかろうか。

（駒澤大学専任講師）